【本文関係資料情報】

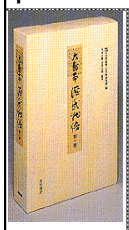
内容

（1）『大島本　源氏物語　全十巻』……1
（2）『保坂本　源氏物語　全 12 巻+別巻』……5
（3）『日本大学蔵　源氏物語　全 13 巻』……6
（4）『御物　各筆源氏』……9
（5）『源氏物語（穂久邇文庫蔵）全 5 巻』……10
（6）『尾州家河内本　源氏物語　全 10 巻』……11
（7）『青表紙本　源氏物語　全 54 帖別冊 2 帖』……12

（1）『大島本　源氏物語　全十巻』

角田文衛・室伏信助　監修

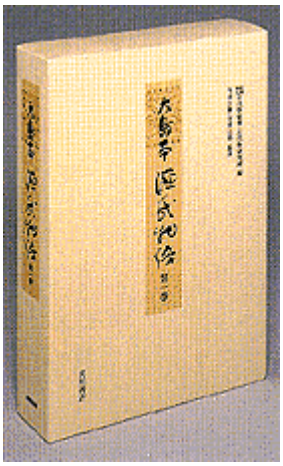
1



資料名	『大島本　源氏物語　全十巻』	内容要旨
編著:監修	角田文衛・室伏信助　監修	源氏物語研究の原点、大島本源氏物語の全容がいま、初めてあきらかになる!　百年に一度の修復の好機を得て、全帖、糸綴じをはずして撮影。ここに空前絶後の影印本を刊行!（パンフレットより）
発行	角川書店	
発売	紀伊國屋書店	
年月日	1996.3	
揃定価	350,000円	

■監修にあたって

東京女子大学教授　室伏　信助



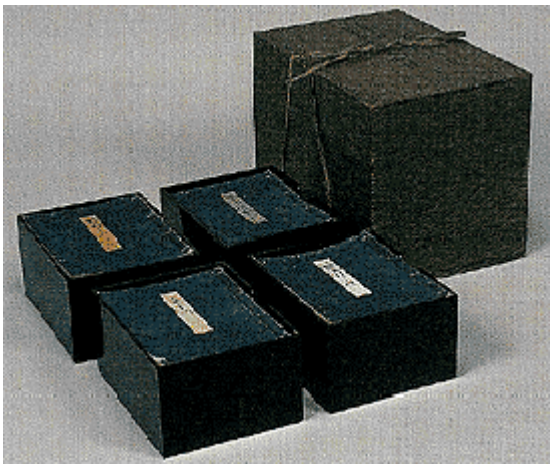
戦後における『源氏物語』のテキストは、一部の例外を除き、その殆どが底本にいわゆる大島本を採択している。それは近代における『源氏物語』の本文研究の総決算ともいうべき『校異源氏物語』が昭和十七年に刊行され、その主底本に大島本が採択されたのに端を発する。戦後になって、これに基づく各種の用語索引と研究資料篇が完備し、『源氏物語大成』全八巻となって聳立した。ここにおいて『源氏物語』の本文研究の基盤は揺るぎないものとなったのである。

しかし、この同種二様の本文はすべて活字によって示されたため、その利便さが翻刻の精緻さと相俟って、写本としての原本を検証する機会を研究者から奪ってしまったとさえいえよう。写本としての大島本は、実のところ活字本と同一ではないのである。写本には無数の修正の跡が残され、しかもその修正は複数次に及んでいる。『校異源氏』『大成』の底本もその修正の跡をたどり、その中から一つを選んで活字として作成されたテキストである。原本を直接閲覧し得なかった研究者は、その活字本に基づいて本文研究を行い、註釈を含むいわゆる高部本文批判を試みてきた。

さまざまな事情があったにもせよ、無数の情報が含まれる原本の様態を回避した研究から、二十一世紀を展望する新しい本文研究、それに基づく註釈評論の類は生まれ得ない。今世紀の最後を飾る記念出版として、高度な印刷技術による本影印本は、はじめて綴じ糸を外して現れた数々の新事実と共に、今後の『源氏物語』研究のあらゆる分野にわたって不可欠の資料たることを信じて疑わない。監修者として同学各位とともに刊行の慶びを分かち合いたい。

■『源氏物語』研究史上、記念すべき事業

東京大学名誉教授・駒沢女子大学教授　秋山　虔



「大島本源氏物語は青表紙本中最も信頼すべき一証本であるが、その数量において、またその形態・内容において稀有の伝本であり、校異源氏物語の底本として採択、その稿を起した当時は勿論のこと、その後二十余年に至るもこれを凌駕する伝本の出現を聞かない。」これは『源氏物語大成　研究資料篇』(昭 31)の中の文言である。

日本古典全書本(昭和 21～30)の凡例には、この大島本を底本として「定家所持本の再建に努めた」とあるが、後続する現行の訳注書も、若干の定家筆本および定家筆本の臨模と目される明融本による十数帖のほかは、大島本を底本に使用するのが常道となった。全書本の方針が踏襲されたのである。

しかしながら、再建のめざされる定家本とは何か。それが必ずしも一元的な底本ではありえず、定家自身による変動の証跡も明らかにされてきているのだから、再建といってもその作業は決して自明のことではないが、しかし、そうした事情を勘案しつつも、前記のごとき大島本の絶対的優位は動かすべくもないだろう。

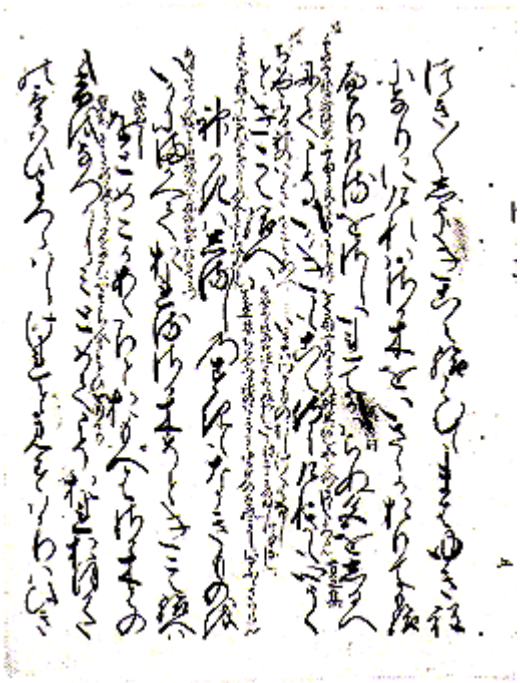
従って、大島本を底本とする『源氏物語大成　校異篇』の本文の価値は今後とも変るはずはないが、しかしながら、その本文には夥しい見セケチ・抹消・訂正・補入等、複雑多様な補訂作業が加えられているのである。その様態の細大漏らさぬ調査報告(新日本古典文学大系本附録)を目にするだけでも、『大成』の底本の活字本に安易に随従すべからざることを実感させられるだろう。その点、このたびこの大島本の全貌が、しかも袋織の綴糸をはずしての撮影によって補訂の過程につき新発見の得られる形で一挙に影印刊行せられることの意義は、なおさらはかり知れないものがある。『源氏物語』の研究史上の記念すべき事業というべきであろう。

■『源氏物語』研究への新しい胎動

大阪大学教授　伊井　春樹

大島本『源氏物語』が影印本として出版されるのを聞き、わくわくするような喜びと感動を覚える。この本が佐渡の某家から出現したのは昭和五、六年とされ、青谿書屋(大島雅太郎氏)の架蔵となり、池田亀鑑博士の知るところとなった。池田博士は、当時芳賀矢一博士記念会のもとで本文研究に従事し、昭和七年には河内本を底本とする『校本源氏物語』の原稿を完成させていた。ところが大島本の存在を知ると、全面的に作業を見直し、底本を河内本から青表紙本に改め、十年後に『校異源氏物語』として刊行、戦後には『源氏物語大成』となったのである。そのころ大島本が世に出ていなかったとすると、池田博士は河内本による校本を出版し、今日もそれが流布本として読まれていた可能性もある。研究者の良心として、困難な作業に立ち向かい、底本を変更するという決意をしたのは、それだけ大島本がすぐれていたためであるとともに、本文にかける執念のすさまじさを思わずにはいられない。

今日、『源氏物語』の研究はまさに隆盛をきわめ、世界的文学としての評価はもはや不動のものとなった。それもひとえに安心して読むことのできる本文があってこそで、それを支えてきたのが大島本の存在である。現在の註釈書の大半が大島本を用いているのによっても、その重要さは明らかであろう。世に知られるようになって六十年余、これまで影印本として出版されてこなかったのが不思議に思われるほどである。大島本には、とても活字化できないさまざまなデータが詰まっている。影印本で徹底的に読むことによって、新しい『源氏物語』の研究の時代が訪れるはずで、この刊行を心から推薦する次第である。



←「賢木」五オ

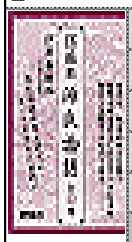
『大島本源氏物語』全十巻の内容

巻数	帖名								
第一巻	桐壷	帚木	空蝉	夕顔	若紫				
第二巻	末摘花	紅葉賀	花宴	葵	賢木	花散里			
第三巻	須磨	明石	澪標	蓬生	関屋	絵合	松風		
第四巻	薄雲	朝顔	乙女	玉鬘	初音	胡蝶			
第五巻	蛍	常夏	篝火	野分	行幸	藤袴	真木柱	梅枝	藤裏葉
第六巻	若菜上	若菜下							
第七巻	柏木	横笛	鈴虫	夕霧	御法				
第八巻	幻	匂宮	紅梅	竹河	橋姫	椎本			
第九巻	総角	早蕨	宿木						
第十巻	東屋	蜻蛉	手習	夢浮橋					

1	大島本源氏物語の由来	……	角田 文衛
2	大島本源氏物語研究の展望	……	室伏信肋
3	大島本源氏物語の書誌	……	藤本孝一
4	大島本源氏物語の様態注と本文批判	……	室伏信助

（２）『保坂本　源氏物語　全 12 巻+別巻』

2



資料名	『保坂本　源氏物語　全12巻+別巻』	内容要旨
編著:監修	伊井春樹　編	本書は、別本の本文を持つ陽明文庫本以上に注目すべき伝本を初めて公開するものである。源氏物語の本文研究において不可欠の資料!!（パンフレットより）
発行	おうふう	
年月日	1995.11～1996.11	
揃定価	234,000円	
各巻	18,000円	

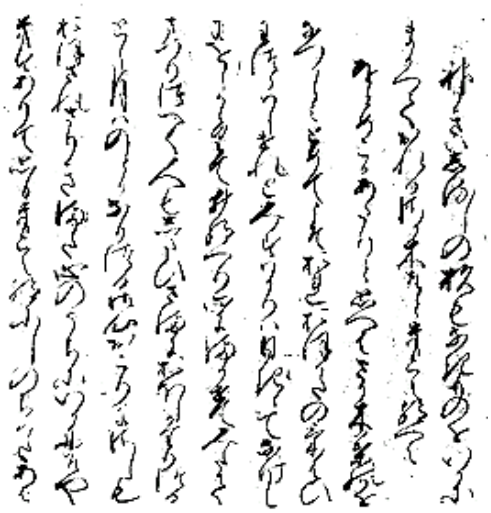
大阪大学教授　伊井　春樹

保坂潤治旧蔵源氏物語(東京国立博物館蔵、重要美術品)は、かつて国宝伝藤原為家筆各筆本として紹介され、『校異源氏物語』『源氏物語大成』に校異として採用された伝本である。桑名藩主松平楽翁公の遺愛品と伝えられ、昭和十年に保坂本となり、現在は東京国立博物館に襲蔵される。本書は浮舟巻を欠く五十三帖、前半の十七帖は三条西実隆等による室町中期の補写、後の三十六帖は鎌倉期の古写本で、「別本が三十四帖もまとまっているのは、この本をもって第一とする」（『源氏物語事典』下）と評価されながら、これまでは校異によってしか本文を知ることはできなかった。別本の本文を持つ陽明文庫本以上に注目すべき伝本であるだけに、ここに写真複製することによってはじめて全貌が明らかになり、本文研究において不可欠の資料となるであろう。

別巻として初めて別本の文節による索引を付した。

■本文研究の新時代を象徴

東京女子大学教授　室伏　信助



源氏物語の本文研究は、かつての青表紙本絶対視の時代から、漸く享受の多様化を直視する新しい時代へと大きく変貌しつつある。ことに近年は、いわゆる別本を微細に吟味することから、逆に青表紙本そのものの成り立ちが透視される画期的な時代へ突入した観すらある、といってもよいであろう。

鎌倉期の古写本で別本が三十四帖もまとまっている保坂本は、従来『校異源氏』や『大成』に校異として採用された活字でしか見ることができなかったが、このたび精巧な複製によって初めてその様態が見られる。源氏注釈史の研究や、現在刊行中の源氏別本集成の主導者として大きな実績をもつ伊井春樹氏の編になる『保坂本源氏物語』の刊行は、原作のない傑作とはいったい何を根拠に言いうるのかに応える、一つの有力な証言としての役割を果すに違いない。

本文研究の新時代を象徴する出版として、その意義を重視し、広く江湖に推薦する。

■『保坂本　源氏物語』全 12 巻・別巻１巻の内容

巻数	帖名					
第一巻	桐壷	帚木	空蝉	夕顔	若紫	
第二巻	末摘花	紅葉賀	花宴	葵	賢木	
第三巻	花散里	須磨	明石	澪標	蓬生	関屋
第四巻	絵合	松風	薄雲	朝顔	少女	
第五巻	玉鬘	初音	胡蝶	蛍	常夏	篝火
第六巻	野分	行幸	藤袴	真木柱	梅枝	藤裏葉
第七巻	若菜(上)	若菜(下)				
第八巻	柏木	横笛	鈴虫	夕霧		
第九巻	御法	幻	匂宮	紅梅	竹河	
第十巻	橋姫	椎本	総角			
第十一巻	早蕨	宿木	東屋			
第十二巻	蜻蛉	手習	夢浮橋			
別巻	本文索引	伊井春樹・伊藤鉄也・中村一夫編				

（３）『日本大学蔵　源氏物語　全 13 巻』

岸上慎二／杉谷寿郎／岡野道夫／阿部好臣　編

3

資料名	『日本大学蔵　源氏物語　全13巻』	内容要旨
編著:監修	岸上慎二／杉谷寿郎／岡野道夫／阿部好臣　編	源氏物語研究に必備!　三条西家証本五十三帖、鎌倉期写本八種を影印(パンフレットより)
発行	八木書店	
年月日	1994.9～	
平均予価	15,000円(分売不可)	

■刊行の主旨

日本大学教授　　杉谷　寿郎

日本大学総合図書館は、戦後古典籍の蒐集に力を注いできており、その結果貴重な文学資料も多数収蔵されることとなった。その貴重書の一部は、「日本大学総合図書館影印叢刊」として複製され、また単独にも翻刻が成されてきたが、重美・重文級の貴重書や稀覯本にあってもいまだ公刊されていない典籍もある。『源氏物語』関係書もその類いであって、刊行を望む声が内外からしきりに寄せられてきている。

このたび、その要望に応えるべく複製を企画したのは、三条西家旧蔵の『源氏物語』五三帖（夕霧巻欠）と、鎌倉時代書写の各巻単独本八帖とである。前者は、三条西実隆と長男公順、二男公条の筆になる紛う方なき三条西家の証本である。昭和三三年に総合図書館が三条西家から購入し、五四年「日本大学総合図書館影印叢刊之三」として桐壷・夢浮橋の両巻が岸上慎二教授の解題を付して複製された。が、同叢刊は市販はされていなく、また頭尾二帖のみの複製であった。今回、全巻の複製を行つて三条西家証本の全貌を公共の場に提供し、研究者の渇を癒すこととしたい。また、後者は、断片的資料ながら書写時点のはやいものであるので、公刊によって重要資料としてその存在価値を発揮することになるであろう。

『源氏物語』諸本の本文については、近年見直しが行われて再評価の動きがしきりである。そのような状況のもと、『源氏物語』の貴重書の公刊は意義深いものがあると確信している。

■活字刊行を果せなかった本

学習院大学名誉教授　松尾 聡

三条西伯爵家蔵の「証本源氏物語」が日本大学の図書館にやっと納まったと聞いた時は本当にほっとした。昭和初年から私も鈴木知太郎氏(後の日本大学国文科主任教授)も三条西公正氏の知遇を頂いて、公正氏を囲む九人の若い仲間で「証本源氏」のそのままの形での活字刊行を企てながら戦局の急迫で空しく遷延、漸く完成という間際に空襲で、一部の紙型だけが残つて灰に帰したというつらい思い出もある。空襲では公正氏のお邸も小宅も焼亡。敗戦直後はただ命を繋ぐことに追われる生活で公正氏には御無沙汰申上げていたが、二三年初冬の頃私は学習院大学の国文学専攻課程新設準備のために任された十万円のお金の使い残しをどう有効に使ったらよいかと思案しつつ古本屋街をさまよっていたら、たまたま公正氏にお会いした。事の次第をお話すると、氏はお家伝来の古書は疎開して無事だが御子息にお家の学問を継ぐ者はいないので然るべき所に譲って伝えたいと思っていた所だとて、「母校の図書館になら」との仰せ。こうしてお金の多寡は気になさらず僅か五万円余で能因本枕草子や伝定家筆伊勢物語以下百余点を賜わった。後で或人から前年春に既に栄花物語を古いお付合いの某書肆に売っておられたと聞かされた。私には気ぶりもお見せにならなかったが、堂上華族のお手許は窮迫しておられたのだった。そうした中で決して譲ろうとはなさらなかった証本源氏を晩年に決然として日本大学に譲られたのは鈴木氏へのよしみと安全保持への祈りのお心からであったことは疑いない。今回の複製は氏の、更に言えば実隆以下御先祖代々のみたまへのこよなき供養であろう。

■青表紙系の代表的証本

東京大学名誉教授・駒沢女子大学教授　秋山　虔

古典の研究が細分化し、方法的にも錯綜する現況なればこそ、おのずから確固たる定礎が要求されることにもなるのだろう。諸文庫諸機関所蔵の古典籍の影印複製が各種刊行されつつあるゆえんだが、このたびの「日本大学蔵源氏物語」全十三巻刊行の意義はまさに格別というほかはない。

その主体をなす三条西家証本源氏物語は、室町末期から近世初期に至る天皇家中心の公家社会において最も尊重せられた青表紙系の代表的証本であり、源氏物語諸本の伝来史のうえで極めて高い地位を占めるものであった。『源氏物語大成　校異篇』に校合資料として採用されており、その本文形態はつとに知られているが、かつて日本大学総合図書館影印叢刊の一として公刊された「桐壷」「夢浮橋」両帖を拝見し、「校異篇」によるのでは、その原状を知るのにいかに不足であるかを実感したことであった。それだけにこのたびの全帖複製の刊行には欣喜雀躍の思いを禁じえない。鎌倉期古写本八帖の加えられることも喜びの限りである。その本文資料的価値は言わずもがな、前記の証本と併せて古筆としての美的価値を享受しうるにつけても、いまさらながら日本の文化伝統、美意識の歴史に決定的な作用をもたらしたこの王朝の古典遺産の偉大さに思いを致さざるを得ないのである。

■時宜を得た影印本刊行　『源氏物語』本文研究の新時代へ

関西大学教授　片桐　洋一

最近、『源氏物語大成　校異篇』の誤りを指摘する学会発表が行われて話題になっている。

しかし、それが誤りの指摘であるということが、矮小化した今の源氏物語本文研究の実態をよく示している。問題は、あの時期にあのように諸本を博捜し、あのような形でその大概を示された池田亀鑑博士のお仕事にあるのではなく、『大成　校異篇』の元版である『校異源氏物語』が完成した昭和十七年から半世紀以上にわたって、もとの写本を見ないで、博士の仕事の結果だけにおぶさって来た『源氏』研究者たちの怠慢にあるのではないか。プロの研究者として本文を論ずるのであれば、写本そのものは見られなくても、せめて写真や影印によりたいものである。

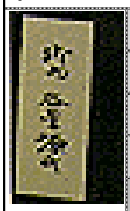
このように思つている折も折、日本大学総合図書館に収集されている『源氏物語』の古写本の影印本が出るという。中心になるのは三条西実隆・公条・公順の筆になる三条西家証本であるが、鎌倉時代書写の本八種も加えられるという。藤原定家の監督下に書写された『源氏物語』が一種類にとどまらぬことが明らかになり、いわゆる青表紙本の実体を再検討しなければならなくなっている時だけに、まさしく時宜を得た企てと言うべきであろう。

●各巻の編成

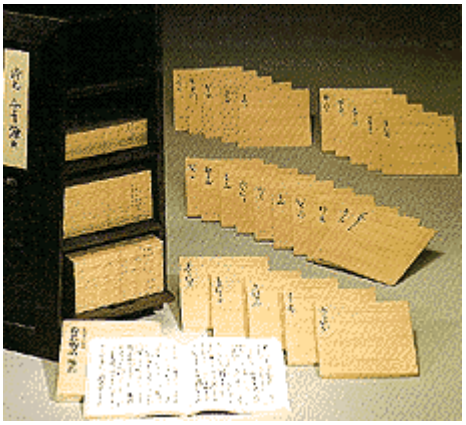
巻数	帖名									
第一巻	一	桐壷	帚木	空蝉	夕顔	若紫				
第二巻	二	末摘花	紅葉賀	花宴	葵	賢木	花散里			
第三巻	三	須磨	明石	澪標	蓬生	関屋	絵合			
第四巻	四	松風	薄雲	朝顔	少女	玉鬘	初音			
第五巻	五	胡蝶	蛍	常夏	篝火	野分	行幸	藤袴	真木柱	梅枝
第六巻	六	藤裏葉	若菜上	若菜下						
第七巻	七	柏木	横笛	鈴虫	夕霧	御法				
第八巻	八	幻	匂宮	紅梅	竹河	橋姫	椎本			
第九巻	九	総角	早蕨	宿木						
第十巻	十	東屋	浮舟							
第十一巻	十一	蜻蛉	手習	夢浮橋						
第十二巻	一	紅葉賀	松風（青表紙本）	松風（河内本）	藤裏葉（河内本）	柏木（河内本）	鈴虫（青表紙本）			
第十三巻	二	夕霧	宿木							

（４）『御物　各筆源氏』

財団法人日本古典文学会　監修

4			
	資料名	『御物　各筆源氏』	内容要旨
	編著:監修	財団法人日本古典文学会　監修	京都御所内、東山御文庫に秘蔵される「各筆源氏」。そのありのままの姿と接する幸運に恵まれた人は少ない。いま、そのときの感激を『源氏物語』を愛する人と分かちあいたい。（パンフレットより）
	発行	貴重本刊行会	
	年月日	1986.12	
	揃定価	330,000円	

■刊行のことば



『源氏物語』は付言することがないほど著名な作品であり、それだけに昔から多くの人々に読まれ、たくさんの写本が残されている。江戸時代に書写されたものを含めれば、五十四帖揃い本だけでも数十部は残っていると思われる。しかし、古写本となると極端に数は減り、『源氏物語』が書かれた平安朝期に書写されたものは、当時、すでに多くの人々に愛読されていたにもかかわらず、単独の巻ですら伝来していない。現存する最古のものは鎌倉・南北朝期のもので、それらはほとんどが国宝、重要文化財に指定されている。御物の中にも『源氏物語』が二部あり、ともに東山御文庫に蔵される。一部は「各筆源氏」と呼ばれる全五十四帖揃い本であり、いま一部は「七毫源氏」と呼ばれる十帖を欠いた袋綴の四十四冊本である。

今回複刻するのは「各筆源氏」で、その名の如く、多くの能勢圭球の手で書写されている点に特徴があり、古典を、とりわけ「源氏」を愛する人々ばかりでなく、書を愛する人々にとっても、見逃すことはできない。また、川圭術的に見ると、青表紙本系統・河内本系統の巻々に比べ、より古態をとどめるとみられる別本系統の本文をもつ巻々を多数含む点が注目されており、御物ゆえに手に取つて見ることのできる可能性はほとんどなく、本妻日の刊行が学界に寄与すること多大で、その価値ははかり知れないと信じて疑わない。

（５）『源氏物語（穂久邇文庫蔵）全５巻』

阿部秋生　編

5			
	資料名	『源氏物語(穂久邇文庫蔵)全5巻』	内容要旨
	編著:監修	阿部秋生　編	元応二年奥書本。桝形列帖装全五十四帖の美本である。重要文化財。(パンフレットより)
	発行	貴重本刊行会	
	年月日	1979.10～1980.2	
	各巻定価	15,450円	

■書目解説

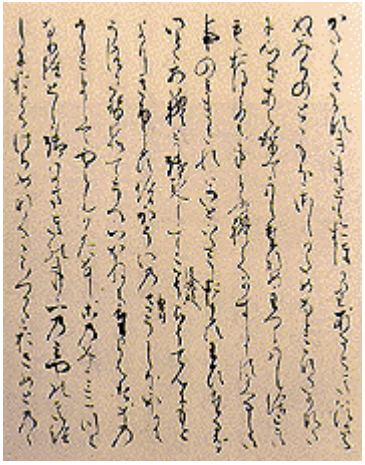
桝形列帖装全五十四帖の美本である。「桐壷」の巻に「元応二年十月　日以故六条内府自筆本書写了　法眼(花押)」の奥書、および「桑門尭空」(三条西実隆)の識語を有し、「夢浮橋」の巻末に「慶長十九稔仲春中澣　従神武天皇百数代末孫太上天皇(花押)」の識語(後陽成院宸筆)を有する、鎌倉末期写本。その本文は青表紙本のほか、別本とみるべき巻々も少なからず存し、『源氏物語』の本文研究の上で全面的な検討が要請されている伝本である。重要文化財。

（６）『尾州家河内本　源氏物語　全 10 巻』

山岸徳平　監修

6			
	資料名	『尾州家河内本　源氏物語　全10巻』	内容要旨
	編著:監修	山岸徳平　監修	重要文化財　尾張徳川家に伝わる秘宝、河内本源氏物語鎌倉時代書写、五十四帖揃いの逸品!(パンフレットより)
	発行	貴重本刊行会	
	年月日	1977.12	
	定価	108,000円	

■刊行のことば



源氏物語が書かれてから、やがて千年になろうとしている。当初から多くの読者を得て、つぎつぎに書写されたが、それだけに、成立後二百年余も過ぎた鎌倉時代の初頭には、諸家の伝える本文の間に、著しい相違が生じた。こうした事態に対応し、時を同じうして校勘作業を企てた成果が、藤原定家の青表紙本であり、源光行・親行父子の河内本である。今日に遺される源氏物語の数多い伝本の大半が、この二つの系統に区別されるのは、よく知られており、両系統本の享受には歴史的な消長があって、現今は青表紙本がもっぱら読まれている。本文研究の結果として、それが比較的原本に近いかとされるのに対し、河内本が、当時あった諸本を参照し、解釈的な校訂を加えたかと思われているからである。しかしながら、『水原抄』『紫明抄』『原中最秘抄』など、源氏物語の初期の注釈書のほとんどが、河内本によって行なわれたし、二つの対立本文を比較して解釈上の論議に資する方法は、今なお活発てある。河内本を抜きにして本文批判をなしえないのは当然だからである。そして、河内本の本文自体の研究も、別本の検討とともに、今後にまつべきところが多いであろう。

尾州家河内本源氏物語は、鎌倉中期の正嘉二年(一二五八)、金沢文庫の創立者として知られる北条実時が、数人の能書家に命じて、当時まだ健在であった源親行の原本から、直接に書写させた本である。爾来、代々鎌倉の将軍家に伝わり、豊臣家をへて徳川家康の手に移ったかともいわれ、その後、尾張徳川家の有に帰して、現在は名古屋市立蓬左文庫の所蔵となっている。ひとり河内本としての雄であるばかりでなく、書写年次が古いこと、由緒・伝来が明らかであること、五十四帖全巻が揃っていることなど、源氏物語の数多い伝本の中でもとくに傑出した存在である。それ故に、約半世紀前の昭和九年六月、徳川黎明会によって、つとに複製刊行されたが、それも今ではまったくの稀覯の書となった。ここに、近時の学界における厳密な方法に基づき、新たに精確な原本照合を行なって、句読点・声点をはじめ、本文上のあらゆる検討に堪え得る複製本を再刊することとした。斯学発展の一助とならば幸いである。　昭和五十二年十二月　財団法人日本古典文学会

■推薦のことば

東京大学教授　秋山　虔

紫式部の同時代から平安末期にかけて源氏物語がどれだけ多くの人々によって書写されたかは想像に余ることである。この物語が無類の傑作であっただけに書写に書写が重ねられたのは当然だが、しかしながらそれらの写本はすべて佚失し、現在われわれの手にしうるのは鎌倉初期の校訂本文である。

それらが青表紙本系と河内本系に大別されることは周知であり、かつ前者のほうがより原作の俤を伝えているとする常識は正しいだろうが、しかしながらそれはあくまで相対的なものであると考えられる。青表紙本の不可解な本文箇所が、河内本によって氷解する場合もきわめて多いが、それらをすべて河内本は解しやすいように改訂されているからだと断定してしまうのは誤りであろう。常識に判断を委ねきってしまうべきではあるまい。

それはともかく、青表紙本が現代の流布本として一般に行きわたっているのに対し、河内本がほとんど読まれることのなかったのは残念なことであったが、このたびまとまった本として最も由緒ある尾州家河内本が覆印されることになったのは望外の喜びである。徳川黎明会版の覆製本に基づきながら、蓬左文庫に現蔵される原本を精査し、河内本独特の句点・声点および注記・振り漢字などについて厳密に校正されている。河内本とはいかなる本文であるのかを、あらためて凝視することができるのは大いなる楽しみである。

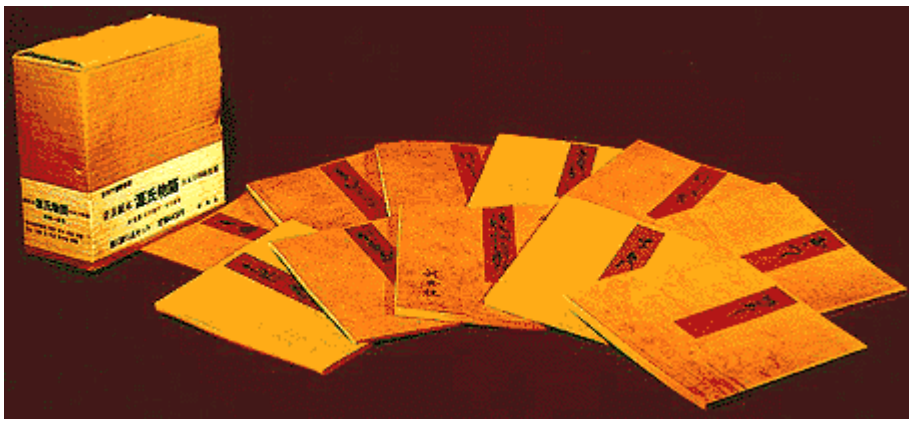
（７）『青表紙本　源氏物語　全 54 帖別冊 2 帖』

山岸徳平・今井源衛　監修

7

資料名	『青表紙本　源氏物語　全54帖別冊	内容要旨
編著:監修	山岸徳平・今井源衛　監修	平安朝の才媛紫式部が、感動をもって綴った世界的な文学遺産を、そのまま現代人に伝える原色版源氏物語の決定版!（パンフレットより）
発行	新典社	
年月日	1968.2～1970.8	
定価	56,299円（分売可）	

■刊行にあたって



薫風に乗せて刊行された世界的傑作「源氏物語」第一期十一冊は、刊行と同時に、国内はもとより、世界各国の大学や各種図書館にも大反響をまき起し、信頼できる唯一の複製として、国際的名声を博しております。これも一重に、古典を愛して止まない皆様方のご声援の賜物と深く感謝しています。

この原色版による「源氏物語」は、現行最善本といわれる宮内庁書陵部蔵の青表紙証本「源氏物語」全五十四帖を、桝形・帖別の原形のまま、美しい筆跡そのままに、新しい技術の粋を駆使して複製したものです。

各帖末尾には、当代一流の権威五十一名の先生方にお願いして、新資料に基づいた適切で明解な解題・登場人物関係図・注をつけていただき、正しい源氏物語理解の一助としました。

別冊として、監修者の山岸徳平・今井源衛両先生が、源氏物語を展望するためのもっとも親切な入門書として、新しく書きおろされた「源氏物語解題」(「源氏物語筆者之数」〃影印〃付)と、平安末期に二十六の巻序で流布していたと思われる有名無実の「雲隠の巻」を、後人の筆ではありますが、これをつけ、五十六冊としました。

小社が自信をもってお贈りする「源氏物語」に、ご期待下さい。(株) 新典社

■監修者のことば

●学界への善本提供と一般学徒のために!

山岸　徳平

古典に関する文運発展の業績中に、藤原定家の明月記と青表紙源氏物語、三条西実隆の実隆公記と源氏物語青表紙証本とは、相対している。その青表紙系本文は、湖月抄その他の刊本などで、広く流布してはいるが、転々書写の誤謬は免れない。ここに、実隆が多年校訂した善本の青表紙証本を、原型のまま複製した。

これは、学界への善本提供と同時に、一般学徒にも写本を知ってこれを愛し、その閲読錬達に資したい念願によるものである。

●重責に心ひきしまる思い!

今井源衛

青表紙本をぬきにして、源氏物語を語ることはできない。それは妖艶の詩美の大歌人藤原定家が定めた、簡潔で余情ゆたかなテキストである。

このたび数多い青表紙本の中でも、ことに確実な証本である書陵部本が、三条西実隆や岩山道堅らの名蹟をそのままに、五十四帖全巻が複製刊行されることとなったのは、学界はもとより、広く文化を愛する人々のために、まことに嬉しいことである。書陵部の英断に感謝するとともに、監修者の一人として、その重責に心のひきしまるのを感じている。